コーディネーターより

イリコの名産地として知られる観音寺市の伊吹島。ところが、この日見たのはイリコではなく井戸。この島では井戸のことを“イズミ”と呼びます。伊吹島は周囲を海に囲まれ、火山岩の固い地質から成るため、地下水を得ることができません。そのため、古くから島の人たちは雨水を貯める天水井戸を掘り、水を得てきました。水道もなく雨水に頼る暮らしとは一体どういうものだったのか。名人の三好兼光さんは、民家の間を縫うような島の細道を、わが庭のように案内しながら語ってくれました。若者の島離れや漁業の先細りなど、課題はありますが、「島にはまだまだ力はある」と名人。先人の知恵が残る島だからこそ、その歴史に未来へのヒントが隠されているのでしょう。

三好兼光（みよしかねみつ）さん
（昭和26年生まれ・64歳）

×

安藤優輝（あんどうゆうき）さん
（香川高専詫間キャンパス4年）

伊吹島に来れば、水の大切さがわかる。

伊吹島の〝イズミ〟の達人　三好兼光さん（観音寺市）

三好さんから受け取った言葉

——僕は生まれたときから、水道があるのが当たり前だったけど、伊吹島では雨水さえも貴重で、何回も利用したり、井戸をたくさんつくったりして、苦労していたそうですね。

おれたちは小さい頃から「水を大事にしろ」と言われてて、水をジャブジャブ使いよったら怒られよったやんね。「水は捨てたらあかん」ゆうてね。顔を洗った後の水を捨てても怒られる。「こっちの貯めるとこにちゃんと入れとけ」ゆうて。顔を洗った水や米のとぎ汁は〝水つぼ〟に貯めて、畑の水やりなんかに使うんよ。そして最後は下肥と混ぜて畑にまくんや。昔は同じ水を3回も使わないといけなかった。

お風呂でも、昔は網元や大きな家しかなかったから、〝炊きもん〟ゆうて山でたき木を刈っておいて、それを持っておいて、風呂を借りに行くんよ。今は水道があるから有難いけどな。でも、水道の蛇口ひねって、使った後の水が下水道へ行くことは皆知っとるけど、それから先のことはわかってないやんね。

香川県はそもそも水が少ない県だからね。それでも、伊吹島に住んでて、夏場に対岸の観音寺へ行くと、農業用水があって、稲穂が出て、風がそよいでる。ああ、この景色っていいなぁゆうかな。住んでいる人には当たり前かもしれんけど、伊吹島にはそもそも田んぼがないから、本当に美しいなぁって感動したもんです。いつもと違う場所へ行ってみると、自分が住んでいる所の良さとか悪さとか見えてくるやんね。だから伊吹島に来ると、水の大切さがわかるんちゃうかな。水に関しては伊吹島は苦労してるところやからね。

——伊吹島を案内してもらって、たくさんイズミ（井戸）があったり、雨水を貯めるために雨どいを無理やりつなげたようなものがあったり、いろいろ驚きました。

伊吹島の歴史や暮らしを展示した民俗資料館へ行ったやろ。水や電気といったライフラインの整備、島の防火対策など、昔の人たちが苦労した跡を追っていくと、先人たちが当時の最先端を駆使して必死で工夫してきたのがわかる。今みたいにハイテクはないけど。今でも大地震がきたら、何日間は電気や水道がなくなるときもある。そんなとき、一番最初に生き延びる術を教えてくれるのは先人たちがどういう風にしてきたか、苦労してきたかいうこと。水を大切に、とよく言われるけれど、瀬戸内海の島々で水に苦労してきたとこ、たくさんあるんよ。

一滴の水が山に降り、そこからちょろちょろ出てきたのが瀬戸内海に流れ込んで、その恩恵を伊吹島は受けとんや。山から流れてきた栄養分がこの海域の藻を育てたり、稚魚を育てるやんね。この辺りでは、反時計回りの潮流が流れていて、河川から流れてきた栄養分を適度に混ぜてくれるんよ。伊吹島の周りに恵まれた漁場があるのは、その栄養を求めて魚が寄ってくるから。この漁場を次の世代にいい状態で残していくのはとっても大事なことやんね。自分たちの生活のことだけやなくて、次の世代のことも考えて動くことは、今生きている人たちの責務やと思うんやけどね。

1 雨水を貯めるためのイズミ　2 三好さんから「平井井戸」の説明を受ける。伊吹島では、家庭用のイズミ以外に、共同の天水井戸もあった　3「平井井戸」の水汲みの様子。水が足りない家は、朝から天秤棒を担いでここに水を汲みに来ており、大層賑わっていた　4 給水船が来るようになってからは、水は切符制で販売されるようになった　5 屋根からイズミに長く伸びた雨どい。イズミの奥にあるのが使用後の水を貯めておく「水つぼ」　6 伊吹島の家々に残るイズミ。今は使われていないが、島を歩けば今もあちこちで見られる
※3 4 写真提供／伊吹島民俗資料館

参加者の感想

伊吹島の暮らしから、“水の大切さ”を改めて感じることができました。今、水道をひねると水が出て、何も気にせず使える。それが当たり前じゃないところや時代があったことを知ることはとても大事なことだと思い、今の暮らしに感謝すべきだと思いました。だから今の瀬戸内海の状況と先人たちの知恵を知り、またそれを次の世代へとつなげ、美しい里海をこれからも守っていくにはどうすればよいかを考えなければならないと思いました。